

## 大学入試の終焉 – 高大接続テストによる再生 –

佐々木 隆生著 北海道大学出版会 (978-4-8329-3379-8) を読んで

川島 一秀(2011年修了)

著者の佐々木隆生氏は、2008年10月から2010年9月まで「高等学校段階の学力を客観的に把握・活用できる新たな仕組みに関する調査研究(通称、高大接続テストの協議・研究)」研究代表を務めた。

本書は、以下の二部構成になっている。

第Ⅰ部 高大接続テストを検討する

第Ⅱ部 日本型の大学入学選抜をめぐって  
大学入学選抜の歴史的な変遷も理解しながら読みたい場合は、第Ⅱ部を先に読んだ方が良いかも知れない。

### 大学の選抜機能

もともと日本の大学は収容力(進学希望者数に対する入学者数の比率)が低く、「受験浪人」が慢性的に生じるほどに進学機会が少なかった。そのため、大学入試の選抜機能が強く働いており、入学させたい学生を合格させるための試験ではなく、定員からはみ出た志願者を落とすための「落第試験」として選抜し、優秀な生徒を獲得していた。

平成4年に205万人いた18歳人口は、現在120万人を切ろうとしている。一方、高等教育機関への進学率は平成に入ってから伸び続け、同16年には「ユニバーサル段階(4年制大学進学者50%以上)」に到達した。平成20年度の国公立大学では2大学が定員を満たさなかったが、私立大学では47%の269大学(2012年264大学(新聞報道))が定員割れしている。専門学校を含め、4人に3人が進学している現在、従来のように選抜性の高い難関校がある一方で、定員割れしている大学等の選抜力は明らかに低下している。

### 高等学校の質の保証

平成25年度から新学習指導要領が実施される高等学校は、「質の保証」が問われている。

従来から、入口で高校入試、出口で大学入試や就職試験という二つの試験に挟まれることで、高等学校の「存在価値」は意識されてきた。つまり、入口では「中学生から選抜」される高校であり、出口では「進学できる」または「就職

できる」必要がある。これらが担保されないと、「中学生に選ばれない」高等学校になり、いずれ淘汰されることになる。今まで、高等学校の「質の保証」について声高にいわれてこなかったのは、この「入口管理」と「出口管理」がそれなりに機能していると認識されていたからである。高等学校では従来から絶対評価されていたが、A校とB校が同じ評価「5」であっても、学校によって達成度に違いは生じる。これらも大学入学選抜によって、(大学の基準で)公平に選抜されると誰もが考えている。しかし、大学の選抜力が低下すると、受験生は自らの力を評価されなくなる。

高3の9月に就職試験が行われるが、そこで不合格になっても、保護者に進学させられる経済力があれば、大学進学可能になっている。

いま、高等学校の「質の保証」が叫ばれているのは、「出口管理」が機能不全に陥った所へ、未履修問題など高等学校における基礎的教科・科目に関する履修問題が影響している。それらの原因は大学入試であるが、高校側として、現実として進路対策をせざるを得ない。本書が指摘するように、履修問題の健全化を図るためにも、大学側が従来通りの「落第試験」に変わる高校段階の達成度を判定できる試験を用意する必要がある。それが、まさしく「高大接続テスト」に他ならない。

### 高大接続テストの目的と要件

「高大接続テスト」が従来のテストとどのように異なるかを説明するために、その目的および要件について、それぞれ4点を指摘している。

#### [目的]

- ①高等学校段階での教育の達成度を客観的に把握する。
- ②大学入学選抜が前提とする学力の達成とそれを基礎とする総合判定による選抜を可能にする。
- ③高等学校での普通教育の再構築を可能とする。
- ④初年次教育やリメディアル教育に必要な資料を提供する。

### [要件]

- ① 普通教育の基幹をなす基礎的教科・科目についてのテスト
- ② 達成度を測るテスト
- ③ 基礎的教科・科目の標準的問題の出題
- ④ 複数回の実施

### 従来のテストと高大接続テストとの違い

従来のテストでは、満点となるようにそれぞれの素点が割り振られたテストにすぎず、例えば、40点の答案が80点の答案の2倍の学力をもっていると判断することはできない。また、公平性を担保するために、全員が同時に受験することを前提にしている。

一方、高大接続テストでは、「項目応答理論(IRT)」に基づくテストであり、1つの問題が1つの項目に対する達成度を測るような問題であり、あらかじめ正答確率と能力なりの学力関係が分かっている問題が使用される。このようなテストは、TOEFL(アメリカに留学する生徒が受ける英語のテスト)やACT・SAT(いずれもアメリカのテスト専門機関が実施するテスト)で実施されており、問題はアイテム・バンクに登録されている。上記テストも年に複数回実施していることから分かるように、高大接続テストも年に複数回実施可能となる。IRTに基づくテストは、テスト回数を重ねるほど実証済みの問題が蓄積されていくので安定的なものとなる。別の資料になるが、「高大接続テスト」が測定しようとする学力イメージをうまく解説している図を以下に紹介する。

下図の山は、学力のイメージを示し、麓の網掛け部分がIRTに基づく問題(図中で「細目積み」

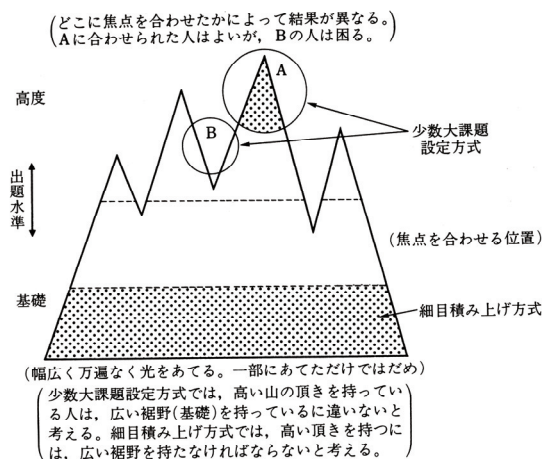


図 3.6 学力の構造とテスト観

(出典：池田 央,1992,『テストの科学 試験に関わるすべての人に』,日本文化科学社,p70)

み上げ方式」と記述)であり、A 及び B の丸は従来型テスト問題を示している。図中 A 及び B は、測定しようとしている学力に到達している場合(問 A)もあれば、到達していない場合(問 B)もあり、出題水準もさまざまである。得意分野が出題されるかどうかにかんがて左右してしまう。

一方、IRTに基づく問題は、1題が1つの達成度を測定する問題であり、出題水準自体は低い、その分出題数は多くする必要がある(引用書籍によると、SAT は言語テスト 90 問、数学テストが 60 問を 75 分で実施する。1問あたりの解答時間は、言語テストで 50 秒、数学テストで 75 秒と短い)。

高大接続テストは、まさしく図の裾野の部分(学力の基礎のイメージ)を測定するテストであり、その得点が高いということは、裾野が広く、高い頂きをもつ山であろうと推定することができる。また、多くの問題をまんべんなく出題することによって、試験科目を特定の教科・科目とせずに、高等学校の必修修科目の内容をしっかりと網羅することも可能となろう。

### 高大接続テストの可能性について

現在の大学入試は「落第試験」であり、あくまで受験者を定員の内外に振り分けるための試験である。しかし、選抜機能が低下し、一般入試が「落第試験」として機能していない大学にとって、高等学校から提出された書類以外に、この「高大接続テスト」の評価は、入学後の有効な処方箋になると考えられる。

現在、定員割れをしている大学ばかりでなく、国公立を含む多くの大学で AO 入試や推薦入試、専門高校・総合学科卒業生入試などの「学力選抜によらない入学試験」を導入している。また、入試方法別の入学者推移から見ても、一般入試を経て入学する学生数はどんどん低下している。このような現状を踏まえ、上級学校へ進学を希望する高校生が全員受験でき、しかも「高校学校の学習内容の達成度」を測定可能な高大接続テストは必要である。

高大接続テストは、複数回受験可能な設計になっている。しかも、高校生の基礎的教科・科目の達成度を測定する試験である。現時点では想定されていないかも知れないが、就職試験においても、「高校生の実力」として、学校側から企業への提出書類としての利用可能かも知れない。

高大接続テストは、高等学校での学びの在り方を大きく変化させ、「学習内容」から「達成度」を意識した授業へと変化を促すであろう。